

株式会社 八洋



▲本社社屋



▲事業所

全車セイフティレコーダで事故半減

飲料水を中心とした自動販売機（以下、自販機）を首都圏に配置し、毎日560台のボトルカーが100万本の飲料水を補充する。自販機の補充作業にはどんな注意が必要か。社では安全と効率を備えたルールを作り、セイフティレコーダを搭載して成果を上げた。取材・執筆 吉岡耀子（交通ジャーナリスト）

70,000台の飲料水自販機、補充には綿密なスケジュール

社の営業所は首都圏全体で22事業所あり、毎朝ここからボトルカーや貨物車両が飲料の瓶や缶、ペットボトルなどを積んで出発する。各車は予め定めたルートに沿って、自販機への補充と空き缶などの回収を進めてゆく。社ではこれを訪問スケジュールと呼び、そこには補充予定の本数だけでなく車両を止める位置も示されている。ボトルカーなどは車体も大きく、停車によって交通を妨げることがないように道路状況に合わせて位置が考えられている。この時、ボトル類の入れ替え作業がしやすい位置を選ぶことも重要で、これにより効率が上がり、停車時間は短く、周囲への影響も小さく抑

えられる。

なお、各車両が受け持つ自販機はおよそ7万台で、道路工事や朝夕のラッシュ、通学路などの情報も取り入れて補充ルートを定めている。

営業所全体の車両数はボトルカー含めて700台、社員は900名で、これら全体の安全運転管理を本社総務部が行っている。

「バック3秒の安全確認」安全運転十か条を徹底

ボトルカーや貨物車両は車体が大きく目視がしにくいので、安全運転のために幾重にも工夫が必要になる。数年前、社ではバックによる事故が増えた時期があり、これをきっかけにバック事故撲滅を目指して

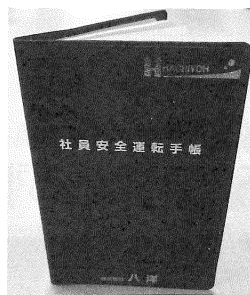
運転と駐車の手順を模索し、次のような項目を定めた。

- ・バック時、右ミラー・左ミラー・バックモニターを必ず確認してから後退
 - ・バック時、同乗者が居る際は、必ず誘導
- こうして明確に指示を出したことも効果的だったようで、バック事故は目立って減少した。

さらに、「安全運転手帳」を作成して運転者全員に配布した。手帳には「安全運転十か条」や事故時の対応そのほかの実務上のことも書かれており、運転免許証を収めるポケットがついていて臨場感がある。



▲お祭り風景



▲社員安全運転手帳



▲バックを誘導



▲納品時の車両止め位置

セイフティレコーダの導入で事故件数が半減

2012年には同規模事業者としては採用実績が少ないセイフティレコーダを全車に装備して、新人でも安全運転ができるようにした。セイフティレコーダには運転評価（採点）機能が備わっていて、「急なブレーキを踏まない、右左折時にしっかり減速ができ安全が確保されている、振動が少ない」などで高得点が得られる。これにより、月単位で事業所ごとの得点を競い、1年間無事故の事業所を表彰するなどして、社全体で高得点を目指している。

また社員の意識向上を目指して毎月10日を安全運転推進デーとし、全車両得点を1位〜下位まで順位付けして高得点者を表彰している。

敷地の一部開放やお祭りで、地域との結びつきを大切に

以上のような社内の努力と並行して、地域との連携・協力で次のような活動を行っている。

- ・車両事故発生者は、教習所と保険会社による安全運転講習会に参加する。社員の

安全運転意識向上

- ・牛込警察署による交通安全の講和
 - ・警視庁実車講習に参加
 - ・地域交通安全推進委員活動、自転車安全モデル企業、交通功労者等表彰式に出席
- 新宿区の本社付近には商店街や学校もあり、本社敷地を一部開放して歩行しやすいスペースを作っている。祭りでは敷地を提供して社務所を設け、神輿の通り道へのカラーコーン設置協力をするなど、「生活インフラ企業」として地域社会への貢献を大切にしている。

蒔田茂正さん（総務部）は2016年に安全運転管理者の任に就きコロナ禍での管理も経験した。「コロナ禍で中止した活動もありますが、今後はズームなどで講和を配信することも考えて、安全管理が途切れないようにしていきたい」と抱負を語った。



▲安全運転管理者の時田さん